

## 哥葛などの元代音について

吉池孝一

## 1. 問題点

「哥」など果摂一等・開口・牙喉音の韻母は中古音で/a/と再構成され(/I/で音韻を[])で音声を表記する。もっとも/I/は十分に体系を考慮したものではなく音の概略を示すという程度のものである。[]はやや音声の差異に重点をおいたものを提示する場合に用いる。)、「菓」(果と同音)など果摂一等・合口・牙喉音の韻母は中古音で/ua/と再構成される。これらの主母音は、現代の北京語では/a/と音韻表記し得るものとなり、開口の/kə/における実際の音声はやや喉の奥の[kɤ]、合口の/kuə/では合口介音の影響でその実際の音声は[kuɔ]に近いものとなる。それで、中古と現代の間、元代における果摂一等字韻母の音価が問題となる。以下、これに非円唇母音を推定する説を紹介し、余論として主母音を非円唇の/a/とすることについて述べる(注1)。

手始めに元代の『蒙古字韻』(朱宗文校訂序 1308年)、『中原音韻』(1324年)、『至元訳語』(元泰定乙丑 1325年和刻本『事林広記』所載)でどのような対応となるかを眺めると次のようである。『蒙古字韻』はパスパ文字のローマ字翻字、『中原音韻』は楊耐思 1981(注2)の推定音、『至元訳語』は長田夏樹 1953(注3)の推定音による。

	中古音	蒙古字韻	中原音韻	至元訳語	現代北京語
哥(開口)	/ka/	go	[ko]	[kə]	/kə/[kɤ]
菓(合口)	/kua/	gǔo	[kuo]	[kuɔ]	/kuə/[kuɔ]

ここで興味深いのは、『至元訳語』で「哥」など牙喉音声母の開口字の韻母に非円唇の[a]を推定するところであろう。非円唇という点は現代北京語と同様であるけれども、『蒙古字韻』や『中原音韻』は普通には円唇母音を想定するようであり両者とは異なったものとなっている。長田 1953は、モンゴル語を表記する音訳漢字に拠り「哥」など牙喉音声母の果摂一等開口字の元代音を[a]と推定し、円唇母音とはしなかった。これはどういうことであろうか。

## 2. 長田説をめぐって—その1

長田夏樹 1953によると、元代の『至元訳語』と、明代初期の『元朝秘史』や『甲種本華夷訳語』とは、モンゴル語の漢字音写において異なる部分があるという。その論旨

の一部を私の言葉で要約し、表で示すと次のようである。左端のローマ字はモンゴル語音である。なお、中期モンゴル語音/a/の音価は広母音の[a]もしくはその若干の変種であったとみて大過ない（以下、「中期モンゴル語音/a/」を「蒙/a/」のように簡略に表記する）。蒙/ä/の音価のほうは難しいけれども半狭母音の[e][ə][ɜ] もしくはその若干の変種であったことにする。円唇性は無かったことだけは首肯されよう。蒙/ö/の音価のほうは更に難しいけれども何らかの円唇母音であったはずであり、それは『至元訳語』において合口介音/u/を持つ果摂一等字で音写されることから分かる。

至元訳語	元朝秘史や甲種本華夷訳語
/gä/ 語頭 : 劫 1 語中末 : 哥箇 1 (開口)	格
/kä/ 語頭 : 怯 語中末 : 可 (開口)	客
/gö/ 菓 1 (合口)	歌哥 (開口), 戈果 (合口), 葛
/kö/ 課 2 (合口)	可 (開口), [渴の使用例ナシ]
/ga/ 合葛 1	中合
/qa/ 匣下 2 渴 1 喝 1	

\* 『至元訳語』につき、用例数 2 以下のものは漢字の後に数字を付した。

表 1

『至元訳語』では、蒙/gä/と蒙/kä/の漢字音写において、語頭と語中・語末で用字を異にする。語頭に「劫」や「怯」を用いる例として、至 164「梯」〈劫赤枯児〉一甲 296「梯」〈格赤吉兀児〉、至 33「野旬」〈怯歇児〉一元 I 37a-4「野」〈客額児〉/甲 45「野」〈客額児〉などがある。これは興味深いことであるけれどもここでは言及せず、語中・語末に使用される漢字のみを問題とする。

なお、中期モンゴル語の子音/g//k//g//q/と漢字音やモンゴル文語表記との対応は単純でなく、用例の数が少ない部分については、表 1 のように割り切った対応をさせることには問題があるかもしれない。また、『元朝秘史』『甲種本華夷訳語』やパスパ文字モンゴル語資料で区別のない/ga/と/qa/は中期モンゴル語で一つの音韻/qa/とされる向きもあるけれども、『至元訳語』ではモンゴル文語のγα と qa の両者に「合」が対応し、qa に「匣」が対応することから見て、両者に何らかの区別があったとせざるを得ない。この点も例を挙げて述べなければならないところであるが稿を改めてということにしたい。ここでは母音の音価が話の焦点であり、子音について考慮の足りない点をご寛恕願えれば幸いである。

上表の『至元訳語』をご覧いただきたい。蒙/gä/を果摂一等開口字の「哥」や「箇」で音写し、蒙/kä/を同じく開口の「可」で音写する。至 73「父」〈愛赤哥〉一元 II 4b-1「父」〈額赤格〉/甲 408「父」〈額赤格〉、至 88「母」〈阿可〉一元 I 11a-1「母」〈額客〉/甲 411「母」〈額客〉などがある。このような例により長田 1953 は開口の「哥」「箇」「可」などの韻母を[a]とした。この手の対応例は少なくなく、幾つか例外はあるけれども、まず問題はなからう。

面白いことに、長田 1953 によると、蒙/gä/や蒙/kä/を果摂一等開口字で音写する法は、『元典章』『輟耕録』『長春真人西遊記』等の元代の漢字音写モンゴル語資料及び『元史』も認められるという。その他以下に示すように、元代の聖旨碑にも僅かながら同様の事例を認めることができる。

一つは蒙/kä/に対応する例である。ここに「安西王マンガラ鼠年（1276）令旨」というパスパ文字モンゴル語と漢字漢語訳が合璧となった碑文がある。この碑文は、パスパ文字が至元六年（1269）に公布されて以降、年代の確定できるパスパ文字モンゴル語資料の最初のものである。この中に問題となる語がある。パスパ文字モンゴル語の $\dot{e}r\text{-}k'\text{-}e\text{-}ud$ （キリスト教士たち）を也里克温と音写する。パスパ文字  $k'e$  は蒙/kä/に相当する音である。これを入声の「克」で音写する。果摂一等開口字は使用されない。

これに次いで「クビライ龍年（1280）聖旨」がある。ここでは $\dot{e}r\text{-}k'\text{-}e\text{-}ud$  を也里可温とする。蒙/kä/に果摂一等開口字の「可」を用いており、『至元訳語』の音写の法と一致する。

「安西王マンガラ鼠年（1276）令旨」は「克」としたわけであるが、この「克」は、『蒙古字韻』で  $k'hij$  と表記され、『至元訳語』では漢語の「風」（モンゴル文語は *kei*）の漢字音写モンゴル語として用いられるところからみて、「克」の字音は  $[kh\dot{a}i]$  のようであったとみてよい。音節末に副母音の  $[i]$  を持つこの音節は、単母音の蒙/kä/の表記には不向きであったのであろうか。蔡美彪 1955（注 4）によると、1276 年のこの令旨の後、1282 年の「アナンダ秦王馬年（1282）令旨」で一度用いられただけで、その他は全て「可」となっている。「可」の声母は無声帯気音の  $[kh]$  であり、蒙/kä/に対応することから見て、「可」の漢字音としては  $[kh\dot{a}]$  のような音を推定することができる。

いま一つは、「モンケ牛年（1253）聖旨」（注 5）というウイグル文字モンゴル語と漢字漢語訳が合璧となった碑文の例である。ウイグル文字で  $MWNKK'\text{-}X'N$ （モンケ汗）とあり、これを漢字で蒙哥皇帝とする。ウイグル文字面からは  $MWNKK'$  の  $K'$  が *ge* であるのか或いは *ke* であるのか決定はできないけれども、漢字音写の蒙哥の「哥」の声母は無声無気音の  $[k]$  であるから蒙/gä/に対応することが期待される。漢字音による限り *möngge* ということになるけれども、ふつうには *möngke* とされるようである。対音において問題が残るにしても、「哥」の漢字音としては  $[k\dot{a}]$  のような音を推定して大

過ない。なお、蔡美彪 1955 によると元代の聖旨等の碑文には当該皇帝名が七例あり全て蒙哥とする。この蒙哥については、長田 1953 にも例が見える。それによると、『輟耕録』と『元史』に蒙哥とあり、明初の『元朝秘史』(X II 16a-5)に蒙格とあるという。いうまでもなく、明初の「格」は蒙/gä/に対応する。

以上、蒙/gä/,/kä/を、「哥」「箇」「可」など果摂一等・開口・牙喉音字で音写する法は、『至元訳語』『元典章』『輟耕録』『長春真人西遊記』『聖旨碑』という元代の資料及び『元史』に認めることができた。聖旨碑の建立にあつては、他の文字資料に比べて、比較的慎重に文字の選択がなされたであろうから、ここに同様の音傾向が見える意味は小さくない。

他方、明初の『元朝秘史』や『甲種本華夷訳語』を見ると、開合の別なく果摂一等牙喉音の「歌哥」(開口)「戈果」(合口)「可」(開口)で蒙/ö/を音写し、蒙/gä/,/kä/の音写には別のグループの字を用いる。「歌」「可」の例は次の通りである。秘 II 3a-5「動(動く)」〈歌多勒〉—モンゴル文語kötül—至ナシ、秘 II 15a-5「板胸」〈可門都兒格〉—モンゴル文語kömüldürge—至 127「攀胸」〈庫木都魯哥〉など。

長田 1953 が指摘した果摂一等・開口・牙喉音字に関する元代資料と明初資料の用法の違いをどの様に考えるか。長田 1953 が「哥」「可」などの果摂一等・開口・牙喉音字に推定した[a]という中舌母音を、元代では蒙/ä/の音写に利用し、それと同じ音を明初では蒙/ö/の音写に利用したとすることも不可能ではない。これは音写の方法が進歩した結果とする見方である。一方、基礎方言の違いとする見方も可能である。すなわち、「哥」「可」などの韻母は元代資料では[a]のような非円唇母音であり、明初資料では[o]~[ɔ]のような円唇母音であったとするもので、私はこの方が無理が少ないと考えている。

なお、蒙/gö/,/kö/に対応する『至元訳語』の例には次のようなものがある。蒙/gö/に対応するもの。至 123「{革+詹}」〈骨林馬〉—元 III 5b-2「鞍{革+詹}」〈戈勒箴〉/モンゴル文語gölime。「菓」の用例には至 278「刷牙」〈菓兒出車〉があるけれども、これに対応する例が他に無く尚検討を要する。蒙/kö/に対応するもの。至 127「攀胸」〈庫木都魯哥〉—秘 II 15a-5「板胸」〈可門都兒格〉/モンゴル文語kömüldürge、至 376「青草」〈課課愛百速〉—甲 618「青」〈闊闊〉/モンゴル文語kökeなどがある。蒙/kö/に対応すると思われるいま一つの「課」の例として、至 450「四月」〈課可〉があるけれども明初の対応例が無く保留としたい。

### 3. 長田説をめぐって—その2

『中原音韻』の「歌戈」部をみると、平声の個所には「哥」などの字があり、上声の箇所には「可」などの字があり、去声の個所には「箇」などの字がある。これにより、これらが同一の韻母(声調の別は除く)であったことがわかる。それだけでなく、「入

声作平声（入声を平声とする）」として「合」などの入声字を平声に配し、「入声作上声（入声を上声とする）」として「葛」「渴」などの入声字を上声に配している。これは、「哥」「可」「箇」などの舒声字（平声、上声、去声）の韻母が、「合」「葛」「渴」などの入声字の韻母と同じか極めて類似していたことを示す。入声の有無について、解釈の上ではともかく、「入声作平声（入声を平声とする）」などとする書き方による限り、入声は舒声と合流していたとせざるを得ない。

『蒙古字韻』はパスパ文字の見出しの下、更に「平」「上」「去」「入」という声調の見出しを立て、それぞれの声調の下に同音となる漢字を収めている。それで、「十四歌」部を見ると、パスパ文字 go という見出しのもと平声「哥」・去声「箇」・入声「葛」があり、パスパ文字 k'o という見出しのもと上声「可」、入声「渴」がある。これより舒声（平上去）の「哥箇」と入声の「葛」、舒声の「可」と入声「渴」が同音か極めて類似していたことがわかる。もっとも、入声を独立させるという書き方による限り、入声と舒声との間になんらかの異なりを設けざるを得ない。

ところが、先に表1で示したように、長田 1953 は、『至元訳語』をはじめ他の元代の漢字音写モンゴル語資料では舒声と入声で音写の仕方が異なると指摘し韻母に次のような音を推定した。

/gä/	哥箇（舒声）	[ə]
/kä/	可（舒声）	[ə]
/ga/	葛合（入声）	[e]
/qa/	渴喝（入声）	[e]

このような「歌戈」部と「十四歌」部の内部の分岐は、元代音の特徴であり、明初の『元朝秘史』や『甲種本華夷訳語』には見られないという。残念ながら同論文の当該箇所には誤植などにより読みにくい箇所があるうえ、入声字の例数自体が極めて少なかったためであろうか、「歌戈」部と「十四歌」部の内部の分岐という興味深い事象とともに、果摂一等・開口・牙喉音字が蒙/gä/,蒙/kä/を音写するという疑いのような事実までも、これまであまり注目されることがなかったように思う。いま煩をいとわず当該箇所を確認すると次のとおりである。

長田 1953 は、「葛」「渴」「喝」が蒙/a/に対応する例として『至元訳語』から次の三例をあげ、『甲種本華夷訳語』の例とそのローマ字表記を対応させている。

- ① 至 383 「松樹」〈赤葛刺孫〉 — 甲 85 「檜」〈赤郭児孫〉 či-go-r-sun
- ② 至 373 「蟻子」〈湿婁喝真〉 — 甲 177 「蟻」〈石舌羅丁罽真〉 ši-ro-qal-ji
- ③ 至 320 「鷹」〈喝里柴合〉 — 甲 190 「黄鷹」〈哈児赤孩〉 qa-r-či-qai

①の甲〈赤郭児孫〉は『元朝秘史』で〈赤戈児孫〉とあり、「郭」「戈」が蒙/gö/（例示でgoとあるところ）を示すこと明らかである。一見する限り、至〈赤葛刺孫〉の「葛」

は蒙/gö/（「郭」「戈」）に対応しており、例として適当ではないように見える。しかしながらここでは、『甲種本華夷訳語』や『元朝秘史』との対応によるのではなく、〈赤葛刺孫〉という表記の「刺」が普通には男性母音の蒙/la/や蒙/ra/に対応することに着目し、前接する「葛」を蒙/ga/に対応すると解釈したのではなかろうか。もっとも、このようなことについての説明はなく、あて推量にすぎない。次に②であるが、至〈湿婁喝真〉とあるけれども、「喝」は「渴」の誤植であり、本論文を掲載した新版でも誤植のままとなっている。③の例に問題はない。「葛」「渴」「喝」が蒙/a/に対応すると考えられる例は以上の三つである。これのみであるならば根拠とするのは難しいように思えるけれども、次のように『輟耕録』『元史』『長春真人西遊記』の中より四例を挙げる。

- ・葛不律（輟 1）、葛不律寒（史 1） — 中合不勒中合中罕qa-bu-l qa-qan（秘 I 30a-3）
- ・博寒葛答吉（史 1）\* — 不中忽中合答吉bu-qu-qa-da-gi（秘 I 10b-1）
- ・「八刺喝孫」漢語為城（長春） — 巴刺中合速壇ba-la-qa-su-tan（秘 X II 2a-4）

\*博寒葛答吉（史 1）の「吉」は「黒」の誤植か

両者併せてみるならば、「葛」「渴」「喝」は蒙/a/に対応している、として良いのであろう。それで、この「歌戈」部と「十四歌」部の内部の分岐をどのように考えるか。長田 1953 は「このことは元代漢字音と明代前期の漢字音体系に差があることを明示するとともに、『元朝秘史』の漢訳が明代に至ってなされたことを裏づけるものである」「このことは黄公紹『古今韻会举要』（一二九七年）の一四歌撰、周德清『中原音韻』（一三二四年）の一二歌戈撰の内部の問題であり、パスパ文字の文献もこの差を示していない。」と述べるにとどめる。

以上ここまで誤認がなかったとしたならば、元代の対音資料よりみて「哥」など果撰一等開口の韻母を非円唇とする有力な字音の層があったという点と、『中原音韻』の「歌戈」部および『蒙古字韻』の「十四歌」部で同列に置かれる舒声字（哥など）の韻母と入声字（葛など）の韻母が、モンゴル語を音写した元代の資料及び『元史』では分岐しているという点を、事実属す事柄として認めてよいのであろう。問題は、この二点と『中原音韻』および『蒙古字韻』との関係である。

#### 4. 余論

『中原音韻』と『蒙古字韻』のほかに、モンゴル語を音写した資料より想定される第三の字音の層を認めてもよいのだけれども、舒声と入声とは異なっていたという前提のもと、主母音に非円唇の/a/のような音を想定するならば、舒声（哥など）と入声（葛など）を同列に置く『中原音韻』や『蒙古字韻』の体系とそれほど離れずに済むのではないかと考える。このようであれば元代音の状況が複雑にならず便利であるという程度のもとお考え頂きたい。なお/a/の音声は[a]~[ʌ]くらいに考えている。

/gä/	哥箇（舒声・開口）	/ɣ/	[ɣ]
/kä/	可（舒声・開口）	/ɣ/	[ɣ]
/gö/	菓（舒声・合口）	/uɣ/	[uɔ]
/kō/	課（舒声・合口）	/uɣ/	[uɔ]
/ga/	葛合（入声）	/ɣʔ/	[eʔ]
/qa/	渴喝（入声）	/ɣʔ/	[eʔ]

/ɣ/はその非円唇性のため蒙/a/の音写に用いられた。/uɣ/のように合口介音[u]の後では介音の影響で [uɔ]のように円唇性の主母音の聞こえを伴い、そのために蒙/ö/の音写に用いられた。入声に声門閉鎖[ʔ]があったかどうかを確定することは困難であるが、いずれにしても舒声とは異なり短調であったと考え、短促調もしくは短調を/ʔ/で示すことにした。それで、/ɣʔ/は短調であったため、実際の音声としては[eʔ]のように聞き取られ、蒙/a/の音写に用いられた。

おもしろいことに、上の状況は、藤堂明保 1978（注 6）が『蒙古字韻』の「十四歌」部に推定した音価とよく合う。同書によると『蒙古字韻』の o ũo は、じつは ʌ ua のことである」とする。パスパ文字 o に対応する漢語音の音価として非円唇母音の[ʌ]を推定している。[ʌ]とする根拠は示されず上の短い一文のみであるが示唆に富む指摘である。

このパスパ文字については次のようなことであろう。『蒙古字韻』のパスパ文字 o は、中期モンゴル語の男性母音の/ol/の表記に使用されるものであるから、その音価が[o]であったか[a]であったかというようなことは問題となるけれども、モンゴル語を表記する場合には、それが円唇母音であったとして大過はない。ただし、そのこととパスパ文字を如何に利用したかということは別である。すなわち、種類に限りのある既存のパスパ文字により漢語音を表記するに当たり、適当なパスパ文字がない場合、新たな表記を作るか近似音を持つパスパ文字を利用するしかない。それで、母音を表記するパスパ文字をみると次のようである。パスパ文字の基本母音は i,u,e,é,o,a の五種ある。もっとも a はチベット文字の表記法に従い特別な文字はなく、子音字に他の母音が後続しない場合 a として補写することとなる。その他に漢語用の母音として hi という表記が考案され使用された。hi は「思 shi」や「僧 shij」などの母音の表記に用いられるところより見て、狭めの中舌母音[i]~[ə]を想定して作られたものに相違ない。e と é の漢語における音がどの様なものであったか難しいけれども [e]~[ɛ]もしくは [ie]~[iɛ]などの前舌性の母音とみて大過ないであろう。それで、漢語の [ɣ]~[ʌ] などの母音を表記する場合、hi のように新たに母音の表記を考案するか、既存の母音表記を利用するしかない。[ɣ]~[ʌ]については、パスパ文字 o を利用して表記したというわけである。もっとも、菓 /kuɣ/などのように、これに合口介音が前接すると実際の音声は[kuɔ]のようになり、そ

の主母音はパスパ文字 o の本来の音に近いものとなる。

藤堂 1978 は「哥」などの果摂一等字を含む「十四歌」部に付されたパスパ文字 o に対して[ɮ]を推定したけれども、「哥」などが蒙/ä/の音写に用いられるところより見て、いまして狭めの主母音として/ɤ/ ([ɤ]~[ɮ]) を設定したい。これにより、『蒙古字韻』の「十四歌」部とモンゴル語を音写した資料の双方の主母音に/ɤ/を推定することとする。

最後に『中原音韻』が問題となる。「入声作平声（入声を平声とする）」などとする書き方から見て、「歌戈」部の舒声に/ɤ/、入声に/ɤʔ/を推定しえるものかどうか難しいところであるが、主母音に円唇母音/o/を推定することについては尚検討の余地があるように思う。

## 注

- 1) 果摂一等の音価の問題について、吉池孝一 2005（「クビライ龍年（1280）聖旨のパスパ文字」『KOTONOHA』24号（2005.9.28）pp. 11-18）で簡単に触れたことがある。
- 2) 楊耐思 1981, 『中原音韻音系』中国社会科学出版社。
- 3) 長田夏樹 1953, 「元代の中・蒙対訳語彙「至元訳語」」『神戸外大論叢』第4巻第2・3号, pp. 91-118. 『長田夏樹論述集（上） 近代漢語の成立と胡漢複合文化』（ナカニシヤ出版。2000年）所収。
- 4) 蔡美彪 1955, 『元代白話碑集録』北京:科学出版社。
- 5) 中村 淳・松川 節 1993, 「新発見の蒙漢合璧少林寺聖旨碑」『内陸アジア言語の研究』VIII, pp. 1-92+8pls.
- 6) 藤堂明保 1978, 「中国の文字とことば」『学研 漢和大字典』学習研究社。pp. 1564-1599. p. 1588 参照。